

高度経済成長の 過渡期に人々に勇気を 与えた吉永小百合

ふじい ひでただ
藤井淑禎
立教大学文学部教授



ふじい ひでただ ●豊橋市生まれ。慶應義塾大学文学部卒業。立教大学大学院博士課程修了。近現代日本文学・文化専攻。主著に『清張闘う作家』『御三家歌謡映画の黄金時代』『小説の考古学へ』『景観のふるさと史』などがある

国民を元気づけ、鼓舞する チアリーダー的存在

何をもって国民的女優とするかは、意見の分かれるところだろう。国民的な人気？ むろん、これもまったくの的外れではない。しかし、誰からも好まれる、多くのファンがいる、というだけでは、どこか心もとなない気がする。ボクが考える国民的女優というものは、一種、国民のチアリーダー的存在だ。国民を元気づけ、鼓舞する存在、と言い換えてもいい。その意味で、た

とえば原節子さんとか山本富士子さん、若尾文子さんなどは、国民的人気はあっても、ボクの定義には当てはまらない。ボクの見るところ、これに当てはまるのは、ある時期までの吉永小百合さんしかないように思える。最新作の『母べえ』まで含めると、吉永さんの出演作は111作にもなるらしいが、ボクはそこでもある時期までの吉永さんを、国民的女優と考えている。ご多分にもれず、ある時期からの（と言っても相当に昔の話だが）吉永さん

前の作品なのである。なぜかと言うと、ほかの登場人物やひいては観客を励まし、時には叱咤し、背中を力強く押しつけてくれるような役柄は、それ以前の作に圧倒的に多いからである。ここでは、その代表作として、『いつでも夢を』（野村孝監督。63年1月封切）の場合を見てみることにしよう。観る者の心を奮い立たせる励ましのメッセージ
ここでの吉永さんの役どころは、下町の町医者（吉永さん）の養女で、准看護婦として

『いつでも夢を』撮影中のスナップ。浜田光夫と吉永小百合
写真提供：マガジンハウス

も、大人の女優だとか、汚れ役への挑戦だとかを、期待されるようになっていったらしい。ご本人もその気になって大いに悩みもしたようだ。

『夢一途』（1988年）などのエッセイ集を読むと、66年の『白鳥』（西河克己監督）のころから、早くもその兆候が見える。まだ20歳を少し越えたばかりのころだ。

実はボクが国民的女優と評価する吉永さんの出演作は、みなこれよりも

『いつでも夢を』の1シーン。
浜田光夫、吉永小百合に橋幸夫が加わり、華やかな青春ドラマを繰り広げる ©日活

養父を助けている定時制高校生だ。学業と仕事の両立に取り組んでいる彼女（ひかるといふ名前なのでピカちゃんと呼ばれている）は、自分のことだけでも手一杯なのに、学友や友達の面倒を献身的にみてまわる。浜田光夫さん演じる町工場勤めのクラスメート（カッチャン）が、定時制ということで差別されて就職試験に失敗すると、我がことのように心配して慰め、励ます。という

か、そんなことでくじけていてどうするのよ、といった調子で背中をどやしつける、と表現したほうが近いかもしれない。

母と二人の弟の面倒をみている、松原智恵子さん演じる紡績工場勤めのクラスメート（アキちゃん）が、働き過ぎて咯血してダウンしたときも、療養所への入所や区役所の手続きを代行してあげたのは、ピカちゃんだった。

一時は悲嘆に暮れていたアキちゃんだったが、ピカちゃんが見舞いに行きころまでにはかなり元

気を取り戻し、病状がさして重くはないことをうれしそうに報告する。ピカちゃんと並んで療養所の庭を歩きながら、アキちゃんは図書室で読んだという定時制仲間をつくったこんな詩をピカちゃんに聞かせてくれる。

「春先の花々の芽が深い根雪の中に生まれるように、僕たちの喜びは日々の厳しさの中で鍛えられる」

たとえ厳しく辛い毎日であったとしても、いつかは必ず春が訪れ、花が咲く、という文字通りの意味だが、逆境にともすればくじけがちな者たちを力強く励まし、勇気づけてくれる。

これと似た場面が、発病したアキちゃんを、ピカちゃんと定時制の先生（演じるのは内藤武敏さん）が見舞うシーンでも見られる。悲観するアキちゃんを励まそうと、先生は彼女の手を取ってこんなふうになんげける。

「手のひらを太陽に透かして見てごらん、赤い血がいっぱい流れているだろう、生きてるって証拠だよ。この力に負けないように、丈夫な体をつくらなくっちゃ」

どこかで聞いた歌の文句とも通じるが、いずれにしても、逆境にある者たちを鼓舞し、力づけてくれることに変わり

はない。就職試験に失敗したカッチャんと結核を発病してしまったアキちゃんも、逆境にある二人を応援するピカちゃんの、ひいては作品が投げかけて寄こす励ましのメッセージは、観る者すべての心をも奮い立たせずにはおかない。

『いつでも夢を』では、こうした鼓舞的メッセージがそれこそ至る所に見られる。『いつでも夢を』というタイトルや主題歌からしてそうだが、圧巻は、定時制高校からの帰途、吉永、浜田、松原といった出演者たちが、その他大勢の役者さんたちと一緒に、総勢十余人で吉永さんのヒット曲『寒い朝』（詞・佐伯孝夫、曲・吉田正）を合唱しながら、工場街の夜道を抜けて家路につくシーンだ。

北風吹きぬく寒い朝も

野越え山越え来る来る春は

いじけていないで手に手をとって

望みに胸を元気に張って ああ

北風の中に呼ぼうよ春を

北風の中に呼ぼうよ春を

アキちゃんが教えてくれた「いつかは必ず春が訪れ、花が咲く」という定時制仲間をつくった詩とも通う内容だ

『いつでも夢を』ポスター。
「青い空には希望の雲が、
広い大地には夢がある！
魅力スターの若さと情熱
溢れるゴキゲン四重奏!!!」
の宣伝コピーが踊る ©日活

雰囲気を持ただよわせてもいるのである。
人々は社会の過渡期に
国民的女優を求めた

『いつでも夢を』を始めとして吉永さんが国民的女優であった時代は、社会的には高度経済成長まっただなかのいわゆる過渡期であり、世の中のいたるところで、新と旧とが角突き合わせていた時代だ。母と弟2人をアキちゃんが細腕ひとつで面倒を見なくてはならないほど福祉は立ち遅れ、カッチャンは優秀な成績にもかかわらず、定時制高校生は世間ズレしているからという理由だけで不採用になるという、不合理がまかり通っている。

しかし、その一方では、「いつかは必ず春が訪れ、花が咲く」きざしのようなものが見られたのも事実だ。アキちゃんは無事療養所に入所でき、退院も近そうだし、カッチャンも次の機会には今度こそ希望が叶えられるかもしれない（封切りの数カ月後に、定時制出身者を差別しないようにとの閣議決定がなされている）。旧態依然たる、でもなければ、旧弊一掃、でもない、文字通りの過渡期なのである。

そうした過渡期だからこそ、もう少し頑ばらなく辛抱すれば、とか、もう少し頑

張れば（夢は叶えられる）といった応援歌が現実味を帯び、観る者聴く者を鼓舞するのだから。これがもう少し前であれば、励まして世の中を変えるのは難しそうだし、もう少し後であればすでに状況は改善されており、励ましなどは不要ということになるかもしれない。吉永小百合さんが「国民的女優」として八面六臂の活躍をしたのは、そうした過渡的な時代を背景としてだったのである。

『いつでも夢を』の中で内藤武敏さん演じる定時制の教師が授業のシーンで、労働時間の制限などを盛り込んだ1911年公布の工場法の話をしたあとで、戦後になるとさらに、働く者が人間らしい生活を営めるよう法律が次々とできつつある、と生徒たちに語りかけているのも、陽光が差し込みかけているこの時代ならではの過渡的な性格を裏付けている。

こうしてみてみると、吉永さんが国民的女優であった時代は、実は人々を鼓舞し元気づける国民的女優が必要な時代でもあったのだと、考えることもできる。だとすれば、やがて20歳そこそこの吉永さんが、元氣一杯の鼓舞型とは一味違う大人の役者を目指し、さ

が、自分たちも含めた、逆境にある者たちへの力強い応援歌だ。

しかも、この場面は登場人物たちの並び方までもがおもしろい。前のほうを自転車を引いた吉永さんが歩き、わずかにおくれ浜田さん、そしてそのうしろに松原さん。その他大勢の役者さんたちは分をわきまえて（？）、彼らの後ろに彼らを頂点とした三角形をつくりながら整然と進む、といった序列社会ぶりが何ともおかしい。しかもそのいつぼうでは、この場面はどことなく「ウエストサイド物語」の亜流的な

らには汚れ役をもこなせる女優へと脱皮しようとしたのは、必然の流れでもあったかもしれない。過渡期の終焉とともに国民的女優が必要とされる時代は、ひとまず終わりを告げようとしていたのだから。

時代はふたたび国民的女優を必要としているのか

さて、ここで目を現在に向けてみよう。ちまたでは『ALWAYS 三丁目の夕日』を始めとして、昭和30年代回顧がまっさかりである。吉永さんが国民的女優であったあの時代である。しかし、その回顧が向かっている先は、コンピューター・グラフィックスやセツトの充実ぶりが誇らしげに語られる

ことに象徴されるように、もっぱら建築物や大道具・小道具などの即物的なものに限られているように見える。その精神性が顧みられることはほとんどない。だが、高度経済成長⇨効率第一主義、物質的価値を至上視する功利主義が一頓挫し、新たな方向が模索され始めている現在、顧みるべきは、その精神性のほうではないだろうか。

しかも、若者を始めとして人々はともすれば無気力におちいり、昭和40年代、学園紛争に代表される社会改革の嵐が吹き荒れたころのエネルギッシュな社会状況とは比べるべくもない。だとすれば、現代はふたたび、人々を鼓舞し勇気を与えてくれる国民的女優を

必要としている時代だとも言える。

『母べえ』の吉永さんが60余歳の肉体に鞭打って、ふたたびこの大役に当たることが不可能ではないが、かつての吉永さんのような存在が彗星のように現れて、我々を鼓舞し、明るい未来へと導いてくれてもいい。単に役者だけのことなら、そうした素質をもった人は何人かはいそうな気がする。しかし、問題は、ストーリーである。『いつても夢を』のような、ああした向目的なストーリーは、こんにち果たして可能なのだろうか。こうして問題は、現代の文学が抱えるアポリア(難問)へもつながっていくのである。☺

(JASRAC 出08000641801)